





十月の歌

十月 秋夕月 小妻 秋笛 せせ成忌 酒部海 十取 夷儀

秋 初時 雨時 雨 初雪 落葉 木比葉 木か

冬 篠 冬 簞 冬 杖 月 大根 冬 枯 枯尾 枯 杖

枯 芦 枯 柳 枯 萩 枯 草 冬 草 枯 聖 阿 比 枇 杷 の 茶 の 不

冬 木 立 麦 時 細 代 冬 蠅 十 鳥 鴨 浮 森

冬 水 鳥 木 兔 水 鳥 木 兔 葱 菜 漬

十一月の歌

十一月 冬 日 和 冬 冬 顔 見 世 髪 置 秋 樂 鉢

大 師 霜 雪 雪 吹 氷



香丸 粟少柱 多仙 三十一 冬の栲 石落む 藪海鼠 乾麩 三十一  
ぬくめさる 追ふ持 三十一

十二月の部

師走 極月 寒 三十三 寒月 寒念佛 櫛火 三十四

炭 三十五 火鉢 火桶 火燧 三十六 埋火 衾 紙衣 三十七

蒲ふ 取中 冬田 三十八

煉拂 冬ぬ 豆打 衣砧 事始 越 厄拂 三十九

長季 四十 大晦日 正月 曆賣 春待 三十一

り年 羊羹 年内立春 除夜 三十二

祝語 十二律

冬 十月の部

十月 神号月

十月をひくきさくく山日 靱 風朗

十月や 新日 竹の 鹿の 角 茶抄

十月と 海の中 月 茶 一 意

十月は 葉や 垣も 畑も 也

多い とも 日暮は 神号月 風朗



小春

小春をや見えおこもてけりく鹿 日人

家の静けさゆき里に小春のな 素心

神留ま

お曳の子はおろけり神のまゝ 旧天

あまもさうけりや神は留ま 一色

ゆきと月をみておれのみま 一色

とや心

大徳、和光日塵なれり

了士を志つて春はあけり翁の日 日人

とせ成る像あり

まげきとそむけりうらう恵は月 素心

法命傳

油のやうま酒をみと田向やれり  
かいま妙法の今はありてや

酒樽の車曳きより法命傳 素心

妻を哀う帯綴りけりや法命傳 一色



都より誅入りぬ命誨 久臧

十夜

岸つらりやし十物此人の翼 曾詠

一夜さきうそつらう十夜証 唯令

夷誨

高野よと町人とあり夷誨 一々

本まふ宿よがし此夷誨 一憲

夷誨凡ふさうんよ藤さうらう 八奈

山里を別なまはる夷誨 曰人

神誨

立浪のさうらう別々神誨 茶静

神誨さうらうぬ人もさうらう ろ布

和討母

日たまりうさうけうそさつ討る 風詠

神村西川砂流さやまさう 八奈

親善此水さうさうしあ志くれ 一憲



とき夜の曉ありておしる  
日人  
松山やぬくふくもくしおける  
久臧

時雨

あつちやきつくとまは 草茎  
素花  
志まれば夜よふまき 湖多哉  
茶静  
干ぬしりや時おれ結ぬ織  
一蕙  
山時雨つて海口におろし  
洞夫  
き山のえゆらうちふまき  
碓令

さびや雨と志くれを一長紙  
史子  
今晩る先是切れしれ  
う布  
よきほつ子のあけし時  
一蕙  
おれしおけらるる時  
久臧  
あつちやとまはしりし  
日人  
えちれ未れと日月  
ハ茶  
来とくしりしあまきや水の泡  
茶静  
叶雨のとおろし  
碓令



区座な日たほしうれう時雨う茶  
 史子  
 かきぬけてるれえうか記志くせしん  
 日人  
 仲えゆる障子た穴もく色れくう  
 素志  
 此天来又存もきぬ志くれくな  
 日人  
 麦れきうは油のやうぬ村雨哉  
 一を  
 時ゆゆや戻り結ばれけをくみ  
 素志  
 戸ぬれを何よ来しやうれくう  
 系静  
 時雨すほくちるもくゆへう  
 曾飲

初雪

はつ雪れ降て船よりぬる  
 風朗  
 卯をや志うも根つぎ記子のよ  
 洞天  
 そつ雪れきろくさくや物た空  
 久藏  
 卯雪のしえは枯しう他の道  
 一意

後紫

ちりしききと書くはな中後紫  
 茶静  
 ちりしききと書くはな中後紫  
 史子



三淨系は後葉に於て土子の  
 土橋の端ぬいゝあかおちる哉  
 田代あよわさとかすき後葉に  
 素古 史子

木の葉

うゝ木葉東去らみよなりよ希  
 三葉ちりゝ木の葉の二葉重りぬ  
 けりゝやなゝき記木如き  
 木の葉を翼よひて松の月  
 望明 久臧 日人 素古

風

善子一日古本かゝりよ吹ゆり  
 本ゝゝゝゝや燈を消すのそ  
 本枯ら門を葱うぬ市に申  
 風や序裏よ飛ととれ鴨  
 本ゝゝゝゝは匠す本の間をさるゝ  
 出物ゝゝゝゝむしれまの角田川  
 本ゝゝゝゝや杓子の写標の下  
 久臧 一色 碓令 洞天 一布 一蓋 一色



本々々々をう息すや揉の猫 洞天  
 六々々一昨日の松植る長者哉 素心  
 日々々々々々本々々々々々は碌の露

冬梅

冬々々々々々といふ人の冬かよへ 久滅  
 けふもえて通るや人の冬梅 日人  
 とくなき際なりきり冬々々々々 史子  
 をまれば冬々々々々なり門の檻 茶静

冬心箋

冬心箋  
 子けりえん又火箸焦一ぬ冬籠 風朗  
 鼻よあて雲波付きり冬ホセ 素心  
 門もれそ人う邪戸なり冬籠 茶静  
 澄ゆる露といふ冬々々々々 一色

冬月

挑灯と旦那の回や冬月 一色  
 草も本々々々々々かき立て冬月 日人



冬於月膏より文て見ゆる之 雑令

大根引

葉くう子ち傳る体にて大根引 素花

四毛をハ破つて刀記さへ大根引 日人

冬枯

冬枯下神の地まに此小百種 一葉

冬枯と葉果近く松の風 風韻

冬枯と葉く船積垣根引 洞天

枯尾花

ちちく子枯く中よと尾花哉 一葉

村尾ふりて形くなく葉子くう 布

ちくく叶枯あつてくく尾花引 史子

かろくくく日初なる枯尾花 風韻

枯尾花果名賣女う葉之郎 一葉

一日古枯ぬ日ち初く枯尾花 一葉

枯尾花ちくくくと形此白く尾 久臧



枯芒

吹おれの香うて枯る芒うれ 素衣  
よもやこをちかづき枯るす記弘 洞天  
枯芒うらよいくとらふれく 日人  
枯うつて一筆強るすまかな 史子

枯芦

枯あし竹中よ妙法蓮華外 一蕙  
枯まろく芦まろく信の法 唯令

枯芦やさるかの風を松の宮 史子  
枯あし寺へのけれハ水とふ記 風郎

枯柳 枯萩

ひくまけ暑うも枯く柳うれ 唯令  
日れもいふ詠いつ追萩枯ふ

枯子 冬草

葛お魚も記ううれ枯まろく 久臧  
厚の枯くまろくうまろく 一色



もろよ記して枯うほかつるま 茶新  
喜け逆と至る喜一冬れま う布

枯野

江舟上や暮さうて 續く枯野を 日人  
枯果る尺若しうぬ 大野哉 久臧  
り先れ記よか 帝あふ 是野記 唯令  
新ゆつと尺る 枯野記 居外 一蕙  
口寸く日れ 暮るふ 枯野哉 八奈

是はう歩して せも 枯野うま 日人  
生皮の油ぬく 香や 枯野越寸 史子

何り茶

何ふふやけ 免て 暖本うれ 風那  
人よち 若芳れ 尺え寸 何る也 日人  
煮くか 日れ 尺もや 何る暖 唯令  
下子と 夕れ 尺えけ 何り茶 八奈  
本れ せよ 立甲 斐けう や 何る也 素花



枇杷花 茶の心

しつすゝよ古り泥よぐり枇杷の心 久臧  
葉の心は日初よまきふや古偶作り 洞天

冬木立

きん日えて響くもや冬木立 洞天  
雪よ向く木立を冬花またし 久臧

麦花

麦花や初入り月花もあて 蛙令

麦花て登らねき〜福よけり 茶静

細代ちを蠲

上<sup>三</sup>下<sup>一</sup>や一手おきね細代ちを 風朗  
短<sup>三</sup>やを振んて入りぬ細代ちを ち布

あをけり夕ハ落るよほ〜ちを 素花

川筋は仲間幾人り細代守 一色

花人と結して来し〜冬の蠲 洞天

千鳥



十はるり喚きねしこゝろ子もかま 八菜

啼やむよ一ねさひれ子もは 風郎

子も啼や冬うつしも冬枯て 雉令

まねくは菴れ登根越寸もは 一色

六も皆生れ一葉れ千もは 布

折返寸も田一はふちもは 一葉

るの冷ねれ子もは冷もな 久臧

ぬるや声ね廣ふ千も哉 日人

大勢でうなく一きり川千も 八菜

鶏れ大勢けきふちもは 風郎

うんと居てかきふくや啼もは 史子

里よ来て祠の実もは千もは 素花

鴨

腫まれを抱へく近し鴨もは 茶好

赫く中へついとちき入小鴨もは 八菜

鴨もや時刻そつれのひもは 一色



襟元は後かたあや鴨の声 史子

浮鴨は夕暮運ふ鳴根を 八奈

鴨の骨うくや鴨は留りて 三布

小一時門うけも鴨は暮 風郎

浮麻鳥

何を依何成ち起りてうき麻鳥 久藏

ふ足な起良てかうく浮麻鳥 三布

鳥は朝の暮うらつて浮麻鳥 史子

死鳥

きしあまよふれと付や池のらう 三布

来しそかきましつちをな一池のそ 史子

かさしぬの帆はあふ死鳥の浮麻鳥 素六

鳥

あまをけおとせけうんやうれ 一色

水をけ押合ておしおきまう 史子

あまのまをま麻て仕じらう 三布



ありてあえてもし松の申 史子  
 水多や兵追し敵もせず 風郎  
 ありとも船も塵をうりつゆの御 素太  
 ありてさわかきとまらむおれ月 八采

木兎

木兎は紅崎で氣のほく月相は 仰天  
 木兎の啼おてくくくくくくく 〃

みそさゝい

こそさゝいあけこやうそ枯すあぬ 風歌  
 はさちつて船のおぬ木やこおさゝい 茶抄  
 まぢう折きさうらうやみそさゝい 日入  
 日らかようかぢさうらうこそさゝい 唯令  
 吉し木も今をゆうやこそさゝい 一蕙  
 花えう月おぬあぬこそさゝい 素太

柴漬

柴漬や女の梓れをさし 一色



葱一葉債

多凡品よき記述入る葱一葉  
子孫よき記述入る葱一葉  
ハ菜

十一月記

霜月

霜月とあほくさなる松葉哉  
霜月や掃口五本此の交尾  
素衣  
史千

冬日初冬之

冬は口をささるる葉のゆり氣  
掃除しと教の行きや冬日初  
風朗  
洞天



うつくしく二色に花の咲けり  
を思ふよ女校の世に事なほよく見え  
ふきこたれありけり

むらら杜若のしづもらてたまに花を 一葉

冬

生長くそをれ事なり松の白 茶静

とく起て人のうきやみけ敷 久蔵

花の伝ふ冬に物か立ちあり う布

舞殿をらおのれきけよひ 一葉

顔見せ

顔見せや香けり日の暮けり 一葉

鳥見せの土草や畑に帯ぬり 桑野

神樂 髪置

うかりを面へのえてたし神楽哉 風前

笛吹を米倉けりあり里神楽 一色

我子等う笛を吹く心神楽也 素花

髪置よ小袖貰ふや乳母の舞 洞天



泮うた 大師傳子燈心

戸ぬせいうしろえせう泮うた 八菜  
ま似れくやくたいとや 泮打 曾郎  
儿まふれあうまうまう 大師粥 ち布  
見才まづぬ人まゝ子燈心 礎令

霜

曉石ぬ死なぬ一物のおれ月 日人  
妻一穂まうま 管入おねい 礎令

夕暮やまおろまおれ行ぬり 系粉  
おろ猫のけけちぬや 倉根の素 河天  
水唐まおの置やう 角田川 日人  
まぐえれそまおれ言まおまお 素花  
夜柳ま小桶ませしお おね哉 八菜  
何れく居ままきま おねい 礎令  
何れまおれ斗りまおれや 門のお 実子  
瓢のまおまおまおまお ちう 風郎



お見えで言よるおれきよきを 日人  
まうけのなまはつまぬおのり 茶抄  
遠くつや田村おのりむおのり 久藏

雪

降雪れ申も月のおほい 一蕙  
秋重す雪きうちを 庭れ 芭 八朶  
雪となくや并んで啼 雀 洞天  
心月を移子の掃く下門の雪 碓令

けしねしやあへてく雪れい 雪成  
雪見えも陸きぬ人の果むる 日人  
雪の地は落ぬるをまけ隈 ち布  
降雪や穴懸おれ眼み光り 一色  
雪の風呂車せつとて何とけり 茶抄  
ほちくゆ雪お雪れ来ぬ 風朗  
船きり水渦を焚く雪きりま 洞天  
お一枚の小れ返りや破風れ雪 一色



香山の額并うや 雪は雪 日人  
 雪ち〜〜〜 麻入 歳の雪 素花  
 積る雪日けう〜〜〜 雪令  
 雪は雪 雪は色んで通り〜 史千  
 雪は戸をう〜〜〜 雪は夜り哉 久減  
 雪のうをう〜〜〜 雪の雪いん 可布  
 雪ち〜〜〜 雪入 雪は雪雪外 一色  
 雪ち〜〜〜 谷の雪や 月雪き〜 旧天

雪は来ん 松の雪は雪〜〜 茶粉  
 雪は雪や 雪の雪うがと友は雪 一蒸  
 雪う来〜 雪の雪は雪の雪 八茶  
 雪の上 雪して雪〜〜 雪の雪〜 乳粉  
 雪は雪〜 雪は雪〜 雪は雪〜 系花  
 雪は雪の雪 雪は雪の雪 一蒸  
 雪の雪 雪は雪の雪 雪は雪の雪 八茶  
 雪は雪の雪 雪は雪の雪 雪は雪の雪 風朗



雪吹

ふきよく雪吹舞る雪吹う都  
史子

氷

ふの宿をまゝ二里先そ袖が  
和女 佛女 女 女 女 女 女  
大きうて世ふよえや  
清らき女とえそて一房は  
史子

あさひの影あふおは内  
唐女 八百里をたむの影を  
う布

雨散

雨を志つて雪を言ふ井はあはれ  
今ぬき橋をけらるる  
おきろらけれけり  
系志  
茶子  
日人

雲

雲多し一けさし  
系子







海胤

活てぬてふ思義のつゆに海胤が  
ろ布

月代やちち一遊く浮海胤  
史子

乾鮭

乾鮭を笑しとろぬ鮭の宿  
日人

乾鮭を釣る下よ子ら産まけり  
ろ布

五蟹山の集まやうて

乾鮭よささくくく世に哉  
史子

海子

水尊野の偏葬より信をつれ  
日人

ゆほのやぬうりてしと海子の美文  
史子

都はくも海子とゆさや人於中  
久藏

區  
くや海子日和を露の奈  
史子

ろ叫

ろ叫やはろろと落し登れ苔  
茶子

鳥叫や信よ抱こ比良の滝  
史子



ぬく先を

并くは新餅拾いぬ寝めを

風詞

つひそをたぬく先をたえさうさう

日人

追鳥指

大男追鳥指了るまのま

可布

十二月神

師走極月

只居れそ柳とえゆる師走のま

洞天

月と日とほまゆる師走哉

ハ奈

汁うせてるはまゆる師走のね

洞天

極月や門まつうくをさる

ハ奈

冬

冬けさのあけまつまのさうさう

日人



ありや解ぬきさよふ伯れちる 風郎  
 きやき麻さよもつひまきかこれ 兼静  
 居はくほときくさうさうへの家 久臧  
 くらかやや橋のきば足さきや 洞天  
 眼よえやきさとなりぬ思れ家 难令  
 入川の夕はかきききはさ郎 八条  
 佛同く用云はきききさう家 一色  
 柔水仙一ほりつきくさ家 日人

粉の干ぬ行渡さすきささま 素花  
 不流の柔れと記りさわさきい 难令  
 立合てきしねすさう山の枝 史子  
 ちよさうさきさうさうき木が 風郎

寒月

あれさきなくてき月すなう 久臧  
 き月や横川の杉れさきき 一色  
 き月や庵下いさう納まけ門 風朗



念佛臘八

いさふに申せりわき念佛  
彌ハや水子茶も表れ山  
一色

檜

檜の火よふ言燈る夕アれ  
降よして仕るうへに檜のり  
檜よ救て尺さハ小なき骸うな  
檜のうりわ未や水息  
茶静  
久臧  
ハ菜  
風朗

注やうろふえく灯もせ檜燭る  
檜賣れ赤まきしわに檜のり  
素花

炭

炭賣をかくれて呼や牛捨子  
炭竈の翼も佛に煙りうぬ  
肩取くまきくもや炭煙り  
炭焼く善き同あうさし  
炭下産は焼くわしと云  
ハ菜  
ろ布  
日人  
洞天  
素花



炭のやれ起れをえゆる柱う郎 碓令

炭焼てけつてきてま 客同哉 一色

炭焼よよおまれよけり 之はいて 旧天

恋わし〜 炉よ積炭のあまきう 史千

そのおく炭えなまれハ凍山えく 日人

椽へも〜 風と〜 走り炭 一色

岡両もはあ〜 ちりちり炭の音 日人

野さおま居よ清〜 ちり炭のり 旧天

ふ若て炭もささむや柔か女 旧天

おらうつくきさ〜 炭けけはら 久臧

火鉢

遠山へひいて 枕実火鉢うま 史子

火桶

火改さ〜 細ささみけ火桶う乳 史千

う〜 居のき引うけか 火桶哉 旧天

け〜 ちりも煮も〜 ちり火桶うま 素心



火燵

馬つた火燵に薪又やほつら 洞天

藤袴んで深丸のまぬき燵に 一色

加茂川も渡りしとて此火燵を 久臧

出の詠をふさくも火燵かよひれ 素花

埋火

埋火や燈の口戸てお少の燈をき 八束

埋火や燈てそらうと相此毛 久臧

埋火や何もない氣て削らふ 史千

衾

なつ風の折くま来る衾を 素静

折く此身遠く衾かな 八束

袂衾押はくおきハふれろ 史子

紙衣

舟子忌の傾城を舟船上り 史千

水も汲火も葺る所の紙子うね 素花



萬葉歌中

横里れまてむつかき層ふとん  
 八奈  
 船〜ヤふんまき〜即ち〜まう  
 久威  
 うん思ふほろたさす〜恵ゆり  
 仰天  
 ぶあきめめ全盛まぬらん那  
 ろ布  
 い〜あむ〜ててぬらん那  
 史子  
 一浦の層とよろこぶ歌中ま  
 茶部

冬田

冬田ヤまはつきとまよひく  
 風郎  
 節〜ま恒結つ冬田つ〜  
 ろ布

猿掛

猿掛う隣へ来〜おれり  
 史子  
 猿〜神の猿掛お〜けり  
 一蕙  
 猿掛〜船もむ〜と来〜まう  
 素花  
 口〜吹〜机の猿をす〜  
 日人  
 阪次好〜起〜猿〜  
 史子



煤掃て休て暮の掃除哉 風朗

きのり 豆打

きのり 猫如容をすむ柱を 史子

豆打や初手一筋ハ喉をい 守郎

衣配 事始

衣配り併してもきおこる 守布

針医者の子同き形や衣配り 一色

来年古田を促らるるけしん

と 越 尺拂

とんもきへき年をいそぬきり 守布

尺拂をらつておろし又いさう 一色

長季の

長季のこむし手むしにあらうる 守布

長季のけ顔の波や面のおら 久藏

長季ののむけとえや身形い 一色

長季のやういさあるるけら 史子



大晦日掛乞

掛乞 大晦日掛乞  
掛乞 大晦日掛乞  
掛乞 大晦日掛乞  
掛乞 大晦日掛乞  
掛乞 大晦日掛乞

曆賣

曆賣 曆賣  
曆賣 曆賣  
曆賣 曆賣  
曆賣 曆賣  
曆賣 曆賣

春待

春待 春待  
春待 春待  
春待 春待  
春待 春待  
春待 春待

行年

行年 行年  
行年 行年  
行年 行年  
行年 行年  
行年 行年



草庵ちかき藤となり花ハ

すみふくあうて此口五年を

こめれそ

けり此笠よふそつく柱り即 史千

年 暮

とけ暮振 広せぬふく云逆り 一 夕

信るや 人もけりうきとけ暮

廿日その口よちり暮りやけ暮 史子

年内之春

春造うけと買とる去手ふと 素衣

け暮りおと人てあうき去年こと 史子

除 ね

人よ係て吹移さうぬ除ねの達 素衣



十二律續篇

光る毛をまううしう移ひろびきり

硬布

とくちへて指ても状しら字本うれ

敷けよまおくの骨をかきならぬ

鼠か

はとまぬ櫛一本乃おもて

、

いづれくあつうひなまこし一畏うな

扇和

お月めおささうな一今と一作

、

靴へ此よく氣のほくや悟匪日

桐 桐

すくみおて毛虫とせうきふん

、

時鳥しとるしてもし一鳴り

樹令

とつさうと三船つくやあお

、

涼しさを背唾おついでかま

抱 義

おや希おまおの孫の小附れ

、

髑けうりええてを焚く指川が

侯 富

まきくうまとわふやま一お申

、

まりなうう水は押うほくふうま

大 柳



肩わけて子供前へ出る火津な  
大梅

灯もして日の暮りての離る如  
ほ暮

行燈の向きを違へる暮かま  
、

宵初より啼つゝく謎のれ  
護拍

あしと嘆むさゝえきぬさりう郎  
、

夜英いち場未となりし本めさる  
粗文

春うゝし浅川越しよ吹ささる  
、

才不よお本女なき畑う郎  
有月

初冬や啼つゝ層のかきひ夢  
、

月よ立そ身よ添ふ秋もなるさう  
老樗

山よてそ暮の雨つゝぬ納豆うれ  
、

空へり煙りもええて木下害  
湖山

晴天や角かえて居る角か取  
、

雲に申活海に魚のめどい  
千格

骨こゝ安かくすや傘お下  
、

雪解や垂りくつてうしの川  
る年



・ 蘇忌や生進そよみて是る袴 了年

・ 山里や荒神柳をさみかなへし 禾木

秋三月お初色まう唐のし

秋の氷と半ふなうて蓮は花 卦就

風の来し壁は透る初日ま

山の月高よして打廻代をな 乙人

初急そつて掃をけちる木の葉

一故きう仕うけておふ記の表 佛風

塵まう横目の利く下かまつら

田よ啼きハ乾くも啼地うま 斗造

一溪の舟れくさよ天は川

草の芽や海をえよも眼のつら 丁造

雑臭をうねとなしてやふふ臭う

戸相をまぬきまなうらうまのふ 麻衣

も掃て人を過すや寸さる川



風朗門人

史千輯

信よのあおえは  
細竹十二坪糸路  
了りてしる  
海東一政進部  
け交の  
まの  
投りて



可々

十の世に 芳名

あふ子孫

あふ世に 芳名

あふ世に 芳名

題十二律後

余性懶墮。差而益甚矣。唯花陰月。下漫誦古。又得意之。發句以慰無聊之外。都不顧百事。一日蓬窓。史子携其所自收十二律者。來為請題。一言十二律者。蓋取意於關東十二家。各自有風調可喜也。受而讀之。則有似



孤月之斜々者有似峻崖之峭  
峭者或曉鶯穿花或雪梅覆塔  
而一不見模擬之風十二律之  
名可謂正當也余性懶墮老而  
益甚矣而不能拚擲此書遂書  
之以塞其責云

天保五

甲午夏五

武芝隱士

源蒼芳漢書

續十二律

述彫

歌仙十二律

同

海內十二律

同



